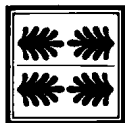


野菊の墓・隣の嫁・春の潮

伊藤左千夫

講談社文庫

A5



講談社文庫

野菊の墓・隣の嫁・春の潮

伊藤左千夫

昭和46年7月1日第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 3930

製 版 株式会社まゆら美研

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 和田製本工業株式会社

© Kodansha 1971

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

講談社文庫

野菊の墓・隣の嫁・春の潮

伊藤左千夫

講談社

本書は、原著の文字づかいを尊重しながら、現代表記（新字・新かな）に改めた。

〈編集部〉

目次

野菊の墓

五

隣の嫁

五九

春の潮

九九

語注

一六四

解説

一六六

左千夫の人と文学

一六六

収録作品について

一七二

年譜

一八三

上田三四二

野菊の墓

後の月という時分が来ると、どうも思わずには居られない。幼い訣わけとは思うが何分にも忘れることが出来ない。もはや十年余も過去った昔のことであるから、細かい事実は多くは覚えて居ないけれど、心持だけは今なお昨日のごとく、その時の事を考えてると、全く当時の心持に立ち返って、涙が留めどなく湧くのである。悲しくもあり楽しくもありというような状態で、忘れようと思う事もないではないが、寧ろ繰返し繰返し、考へては、夢幻的な興味を貪もがつて居る事が多い。そんな訣からちよつと物に書いて置こうかという氣になったのである。

僕の家というは、松戸から二里ばかり下さがつて、矢切の渡しを東へ渡り、小高い岡の上でやはり矢切村と云つてゐる所。矢切の齋藤と云へば、この界限かいぎんでの旧家で、里見の崩れが二三人ここへ落ちて百姓になつた内の一人が齋藤と云つたのだと祖父から聞いて居る。屋敷の西側に一丈五六尺も廻るような椎いの樹が四五本重なり合つて立つて居る。村一番の忌森よみもりで村じゅうから羨うらやましがられて居る。昔から何ほど暴風あらしが吹いても、この椎森のために、僕の家ばかりは屋根を剥はがれたことはただの一度もないとの話だ。家なども随分と古い、柱が残らず椎の木だ。それがまた煤すすやら垢あかやらで何の木か見別けがつかぬくらい、奥の間の最も煙に遠いところでも、天井板がまるで油炭

で塗ったように、板の木目も判らぬほど黒い。それでも建ちは割合に高くて、簡単な欄間もあり銅の釘隠しなども打ってある。その釘隠しが馬鹿に大きい雁であつた。もちろんちよつと見たのでは木か金かも知れないほど古びている。

僕の母なども先祖の言い伝えだからといって、この戦国時代の遺物的古家を、大へんに自慢されて居た。その頃母は血の道で久しく煩らつて居られ、黒塗的な奥の一間がいつも母の病褥となつて居た。その次の十畳の間の南隅に、二畳の小座敷がある。僕が居ない時は機織場で、僕が居る内は僕の読書室にしていた。手摺窓の障子を明けて頭を出すと、椎の枝が青空を遮つて北を掩うている。

母が永らくぶらぶらして居たから、市川の親類で僕には縁の従妹になつて居る、民子という女の兄が仕事の手伝いやら母の看護やらに来て居つた。僕が今忘れることが出来ないというのは、その民子と僕との関係である。その関係と云つても、僕は民子と下劣な関係をしたのではない。

僕は小学校を卒業したばかりで十五歳、月を数えると十三歳何カ月という頃、民子は十七だけれどそれも生れが晚いから、十五と少しにしかならない。瘦ぎすであつたけれども顔は丸い方で、透き徹るほど白い皮膚に紅味をおんだ、誠に光沢の好い児であつた。いつでも活々として元気がよく、その癖気は弱くて憎気の少しもない児であつた。

もちろん僕とは大の仲好しで、座敷を掃くと云つては僕の所をのぞく、障子をはたと云つては僕の座敷へ這入ってくる、私も本が読みたいの手習がしたいのと云う、たまにはハタキの柄で僕の背中を突いたり、僕の耳を摘まんだりして逃げてゆく。僕も民子の姿を見れば来い来いと云

うて二人で遊ぶのが何より面白かった。

母からいつでも叱られる。

「又民や政の所へ這入つてゐるナ。コラアさつきと掃除をやつてしまえ。これからは政の読書の邪魔などしてはいけません。民や政は年上の癖に……」

などとしきりに小言を云うけれど、その実母も民子をば非常に可愛がつて居るのだから、いっこうに小言がきかない。私にも少し手習をさして……などと時々民子はだだをいう。そういう時の母の小言もきまつてゐる。

「お前は手習よか裁縫です。着物が満足に縫えなくては女一人前として嫁にゆかれませんか」

この頃僕に一点の邪念が無かつたはもちろんであれど、民子の方にも、いやな考えなどは少しも無かつたに相違ない。しかし母がよく小言を云うにも拘らず、民子はお朝の御飯だ昼の御飯だというては僕を呼びにくる。呼びにくる度に、急いで這入つて来て、本を見せろの筆を借せのと云つては暫く遊んでゐる。その間にも母の薬を持ってきた帰りや、母の用を達した帰りには、きつと僕の所へ這入つてくる。僕も民子がのぞかない日は何となく淋しく物足らず思われた。今日は民さんは何をしてゐるかなと思ひ出すと、ふらふらと書室を出る。民子を見にゆくというほどの心ではないが、ちよつと民子の姿が目に触れば気が落着くのであつた。何のこつたやっばり民子を見に来たんじやないかと、自分で自分を嘲つたようなことが屢々あつたのである。

村のある家さ贅女がとまつたから聴きにゆかないか、祭文がきたから聴きに行こうのと近所の女共が誘うても、民子は何とか断りを云うて決して家を出ない。隣村の祭で花火や飾物があるか

らとの事で、例の向うのお浜や隣のお仙等が大騒ぎして見にゆくというに、内ものらまで民さんもいっしょに行つて見てきたらと云うても、民子は母の病氣を言い前まえにして行かない。僕もありそんな所へ出るは嫌いやであつたから家に居る。民子はこそそと僕の所へ這入はいつてきて、小聲で、私は内に居るのが一番面白いわと云つてニツコリ笑う。僕も何となし民子をばそんな所へやりたくなかつた。

僕が三日置き四日置きに母の薬を取りに松戸へゆく。どうかすると帰りが晩おそくなる。民子は三度も四度も裏坂うらさかの上まで出て渡しの方を見ていたそうで、いつでも家中のものに冷かされる。民子は真面目になつて、お母さんが心配して、見てお出で見てお出でというからだと言いわい訣わけをする。家の者は皆ひそひそ笑つてゐるとの話であつた。

そういう次第だから、作きおんなのお増などは、むしろと民子を小面憎こづきがつて、何かといふと、

「民子さんは政夫さんとこへばかり行きたがる、隙ひまさえあれば政夫さんにこびりついている」などとしきりに云いはやしたらしく、隣のお仙や向うのお浜等までかれこれ噂うわさをする。これを聞いてか、嫂あにさまが母に注意したらしく、ある日母は常になくむずかしい顔をして、二人を枕もとへ呼びつけ意味あり氣げな小言を云うた。

「男も女も十五六になればもはや児こ供どもではない。お前等二人もあまり仲が好過ぎるとて人がかれこれ云うそうじゃ。氣をつけなくてはいけない。民子が年かきの癖によくない。これからはもう決して政の所へなど行くことはならぬ。吾子わがこを許すではないが政はまだ児供だ。民やは十七では

ないか。つまらぬ噂をされるとお前の体に疵がつく。政夫だって気をつけろ……。来月から千葉の中学へ行くんじゃないか」

民子は年が多いしかつは意味あつて僕の所へゆくであろうと思われたと気がついたか、非常に愧じ入った様子に、顔真赤にして俯向いている。常は母に少しくらい小言云われても随分だだをいうのだけれど、この日はただ両手をついて俯向いたきり一言もいわない。何の疚しい所のない僕はすこぶる不平で、

「お母さん、そりやあまり御無理です。人が何と云つたつて、私等は何の訣もないのに、何か大変悪いことでもしたようなお小言じやありませんか。お母さんだつていつもそう云つてたじやありませんか。民子とお前とは兄弟も同じだ、お母さんの眼からはお前も民子も少しも隔てはない、仲よくしろよといつても云つたじやありませんか」

母の心配も道理のあることだが、僕等もそんないやらしいことを云われようとは少しも思つて居なかつたから、僕の不平もいくらかの理はある。母はにわかにやさしくなつて、

「お前達に何の訣もないことはお母さんも知つてゐるがネ、人の口がうるさいから、ただこれから少し気をつけてと云うのです」

色青ざめた母の顔にもいつしか僕等を真から可愛がる笑みが湛えて居る。やがて、

「民やはあの又薬を持ってきて、それから縫掛けの袷を今日中に仕上げてしまいなさい……。政は立ったついでに花を剪つて仏壇へ捧げて下さい。菊はまだ咲かないか、そんなら紫苑でも切つてくれよ」

本人達は何の気なしであるのに、人がかれこれ云うのでかえって無邪気でいられないようにしてしまふ。僕は母の小言も一日しか覚えていない。二三日たつて民さんはなぜ近頃は来ないのかしらんと思つたくらいであつたけれど、民子の方では、それからというものは様子がからつと變つてしまつた。

民子はその後僕の所へは一切顔出ししないばかりでなく、座敷の内で行逢つても、人のいる前などでは容易に物も云わない。何となく極りわるそつに、まぶしいような風で急いで通り過ぎてしまふ。よんどころなく物を云うにも、今までの無遠慮に隔てのない風はなく、いやに丁寧に改まつて口をきくのである。時には僕があまりにわかにかまつたのをおかしがって笑えば、民子も遂には袖で笑いを隠して逃げてしまふという風で、とにかく一重の垣が二人の間に結ばれたような氣合になつた。

それでもある日の四時過ぎに、母の云いつけで僕が背戸の茄子畑に茄子をもいで居ると、いつものまにか民子が箆を手に持つて、僕の後ろにきていた。

「政夫さん……」

出し抜けに呼んで笑っている。

「私もお母さんから云いつかつて来たのよ。今日の縫物は肩が凝つたろう、少し休みながら茄子をもいできてくれ。明日麴漬をつけるからつて、お母さんがそう云うから、私飛んできました」

民子は非常に嬉しそうに元氣一パイで、僕が、
「それでは僕が先にきているのを民さんは知らないで来たの」

と云うと民子は、

「知らなくてサ」

にこにこしながら茄子を採り始める。

茄子畑というは、椎森の下から一重の藪を通り抜けて、家より西北に当る裏の前栽畑^{せんざいばたけ}。崖の上になつてゐるので、利根川はもちろん中川までもかすか見え、武蔵一えんが見渡される。秩父から足柄箱根の山々、富士の高峰^{たかね}も見える。東京の上野の森だというのもそれらしく見える。水のように澄みきつた秋の空、日は一間半^{いっけんはん}ばかりの辺^へに傾いて、僕等二人が立つて居る茄子畑を正面^{まへ}に照り返して居る。あたり一たいにシンとして又いかにハッキリとした景色。吾等^{われら}二人は真に画中の人である。

「マア何という好い景色でしょう」

民子も暫く^{しばらく}手をやめて立つた。

僕はここで白状するが、この時の僕はたしかに十日以前の僕ではなかつた。二人は決してこの時無邪気な友達ではなかつた。いつの間にかそういう心持が起つて居たか、自分には少しも判らなかつたが、やはり母に叱られた頃から、僕の胸の中にも小さな恋の卵^{たまご}が幾個か湧きそめて居たに違いない。僕の精神状態がいつの間にか変化してきたは、隠すことの出来ない事実である。この日初めて民子を女として思ったのが、僕に邪念の萌芽^{もがみ}ありし何よりの証拠じや。

民子が体をくの字にかがめて、茄子をもぎつつあるその横顔を見て、今更のように民子の美しく可愛らしさに気がついた。これまでも可愛らしいと思わぬことはなかつたが、今日はしみじ

みとその美しさが身にしみた。しなやかに光沢のある鬢の毛につつまれた耳たば、豊かな頬の白く鮮かな、顎のくくしめの愛らしき、顎のあたりいかにも清げなる、藤色の半襟や花染の襷や、それらがことごとく優美に眼にとまった。そうなると思ろしいもので、物を云うにも思切った言は云えなくなる、羞かしくなる、極りが悪くなる、皆例の卵の作用から起ることであろう。

ここの十日ほど仲垣の隔てが出来て、ロクロク話もせなかつたから、これも今までならばむろんそんな事考えもせぬにきまつて居るが、今日はここで何か話さねばならぬような気がした。僕は初め無造作に民さんと呼んだけれど、跡は無造作に詞が継がない。おかしく喉がつまつて声が出ない。民子は茄子を一つ手に持ちながら体を起して、

「政夫さん、何に……」

「何でもないけど民さんは近頃へんだからさ。僕なんかすっかり嫌いになったようだよ」

民子はさすがに女性で、そういう事には僕などより遙かに神経が鋭敏になっている。さも口惜しそうな顔して、つと僕の側へ寄つてきた。

「政夫さんはあんまりだわ。私がいつ政夫さんに隔てをしました……」

「何さ、この頃民さんは、すっかり変つちまつて、僕なんかには用はないらしいからよ。それだつて民さんに不足をいう訣ではないよ」

民子はせきこんで、

「そんな事いうはそりや政夫さんひどいわ、御無理だわ。この間は二人を並べて置いて、お母さんにあんなに叱られたじやありませんか。あなたは男ですから平気でお出でだけど、私は年は多

いし女ですもの、あア云われては実に面目がないじゃありませんか。それですから、私は一生懸命になってたしなんで居るんです。それを政夫さん隔てるの厭になつたろうのと云うんだもの、私はほんとにつまらない……」

民子は泣き出しそうな顔つきで僕の顔をじいツと視ている。僕もただ話の小口にそう云うたまでであるから、民子に泣きそうになられては、かわいそうに気の毒になつて、

「僕は腹を立てて言つたでは無いのに、民さんは腹を立つたの……僕はただ民さんがにわかに変つて、逢つても口もきかず、遊びにも来ないから、いやに淋しく悲しくなつちまつたのさ。それだからこれからも時々遊びにお出でよ。お母さんに叱られたら僕が咎を背負うから……人が何と云つたつてよいじゃないか」

何というても児供だけに無茶なことをいう。無茶なことを云われた民子は心配やら嬉しいやら、嬉しいやら心配やら、心配と嬉しいとが胸の中で、ごつたになつて争うたけれど、とうとう嬉しい方が勝を占めてしまった。なお三言四言話をするうちに、民子は鮮かな曇りのない元の元氣になつた。僕ももちろん愉快が溢れる……宇宙間にただ二人きり居るような心持にお互になつたのである。やがて二人は茄子のもぎくらをする。大きな畑だけれど、十月の半過ぎでは、茄子もちらほらしかなくて居ない。二人で漸く二升ばかりずつを採り得た。

「まア民さん、御覧なさい、入日の立派なこと」

民子はいつしか箆を下へ置き、両手を鼻の先に合せて太陽を拜んでいる。西の方の空は一たいに薄紫にぼかしたような色になつた。ひた赤く赤いばかりで光線の出ない太陽が今その半分を山

に埋めかけた処、僕は民子が一心入日を拝むしおらしい姿が永く眼に残ってる。

二人が余念なく話をしながら帰ってくると、背戸口の四つ目垣の外にお増がぼんやり立って、こっちを見て居る。民子は小声で、

「お増が又何とか云いますよ」

「二人共お母さんに云いつかって来たのだから、お増なんか何と云ったって、かまやしないさ」
一事件を経る度に二人が胸中に湧いた恋の卵は層を増してくる。機に触れて交換する双方の意志は、直に互の胸中にある例の卵に至大な養分を給与する。今日の日暮はたしかにその機であった。ぞつと身振いをするほど、著しき徴候を現したのである。しかし何というても二人の関係は卯時代で、極めて取りとめがない。人に見られて見苦しいようなこともせず、顧みて自ら疚しいようなこともせぬ。従ってまだまだ暢気なもので、人前を繕うと云うような心持は極めて少なかった。僕と民子との関係も、このくらいでお終いになったならば、十年忘れられないというほどにはならなかっただろうに。

親というものは何処の親も同じで、吾子をいつまでも児供のように思っている。僕の母などもその一人に漏れない。民子はその後時折僕の書室へやってくるけれど、よほど人目を計らって気ばねを折ってくるような風で、いつきても少しも落着かない。先に僕に厭味を云われたから仕方なしにくるかとも思われたが、それは間違っていた。僕等二人の精神状態は二三日と云われぬほど著しき変化を遂げている。僕の変化は最も甚しい。三日前には、お母さんが叱れば私が科を背負うから遊びにきてとまで無茶を云うた僕が、今日はとてもそんな訣のものでない。民子が少し